

2018年度 社会福祉法人デンマーク牧場福祉会

特別養護老人ホーム ディアコニア 事業報告

施設長 金高美江子

ディアコニアの運営方針である「今、目の前におられるお一人おひとりを大切にします」に則り、長い人生の道のりを歩んでこられた利用者の方々が、「自分自身が大切にされている。」と感ずることのできるよう環境整備に取り組んだ。生活の質の向上として、移動販売業者による「お買い物会」を年2回実施した。また、リフト浴を新たに2台導入し、利用者は安全で心地良い入浴ができるようになった。「お買い物会」は今後も継続して行っていく。

職員の人材育成として、富山型デイサービス、大阪るうてるホームへの施設見学を行い、共生型サービスの導入準備が進んだ。主任クラスには、職員の個の力を生かすことができるよう組織の重要性を学ぶ研修を実施した。

2018年度は23人の方の看取りをさせていただいた。看取り期から退去後の振り返りのための「偲びの会」までをチャプレン（施設付き牧師）と連携をとって、ご本人にはもちろんのこと、ご家族にもご納得いただけるようなターミナル期を過ごすことができ、そのことが職員への大きな学びとなった。

開設当初から提供してきた訪問介護サービスを利用者数数の減少等により9月から休止した。

1. <経営>

2018年度当期資金収支は700万円のマイナスとなった。サービス別にみると、特別養護老人ホームは介護報酬等の改正のより前年度と同等であったが、デイサービス及び居宅介護支援事業所の収入が前年度と比較して減少した。2019年度は特別養護老人ホーム及び在宅サービスの稼働率の向上による収支の改善を見込んでいる。

・特別養護老人ホーム

2017年度稼働率は97.05%から、2018年度は稼働率95.26%であったことが収益悪化に繋がった。稼働率100%に近づける為2019年5月からは、ショートステイを特別養護老人ホームの入居部門に組み入れる組織変更を行い、ショートステイの空床利用が速やかに行えるよう取り組む予定である。

・ショートステイ

年間の利用者数では、2017年度1,790名、2018年度1,846名で年毎に増加している。現状、週末や単発的に数日間利用される方が多い。特別養護老人ホームへの入居を待っている方々等が入居前にショートステイを利用できるようにすることで、稼働率を増やすことができる。

・デイサービス

2017年度のデイサービスの利用者数は5,195名で、2018年度は5,041名であった。新規利用者が少なく、他施設との競合が起きていると思われる。近隣の居宅支援事業所との連携を強化し、新規利用者を獲得する働きかけが必要である。このため、レクリエーションの充実や利用者ひとりひとりにあったサービスを提供することを目指している。

・居宅介護支援事業所

ケアマネージャー3名の体制であり、3月時点では要介護利用者と介護予防プラン含めて85名の利用者を受け持っていた。主任ケアマネージャー1名配置していることにより特定事業所加算が取得できている。ケアマネージャー1名あたり40名の利用者を担当できるよう目指している。

2. <職員>

日本全体が人材不足の状況となっており、職員の採用は益々困難となってきている。2019年4月には大卒の学生1名が採用できる。また、現在働いている職員が長くここで働いてもらえるような方策を検討している。早番・遅番・夜勤が出来る職員が限られており、職員が超過勤務で対応している場面が多く見られた。業務分析を行い、介護助手による業務改善を行うことも検討している。

まきばの家 事業報告

施設長 小久保秀樹

1. 職員研修の充実

「育ちあう職員集団」として、経験年数及び職種を考慮しながら各種の研修に積極的に参加し、主に職員会議で内容を報告し、職員全員が共有できるようにした。個々の研修計画を基にして、動機付けをしながら研修に参加している。なお、職員研修の充実に関しては、2016年度に行なった第三者評価においても高い評価を得ることができた。全国児童養護問題研究会、小舎制養育研究会、子どもの虹情報研修センター、日本キリスト教児童福祉連盟、全国児童養護施設協議会、などの全国規模の研修をはじめとして、静岡県児童養護施設協議会などが主催する県内の研修、さらには、非行と向き合う親たちの会、キャンプ技術講習など、多岐にわたる研修に参加した。

2. 職員

新規に3名を採用し、25名(4人パート採用含む)の職員でスタートした。他施設同様、職員確保が難しく、国が定めた職員の配置基準である職員1人:こども4人は確保するも、加算職員の配置までは叶わなかった。

例年同様、エルダー制度(先輩職員が個々の新人職員を担当し、助言指導、振り返り等を行う。)を活用し、新人職員の育成、定着を図った。

こども担当制は従来通り行わないものの、職員を4ユニットに分けチーム制とし、チーム内で子どもの養育について議論し合える体制をしいた。

3. 経営面

2017年8月、新しい社会的養育ビジョンが出され、児童養護施設はこれまで以上に地域の実情を把握していくことが求められている。経営面では、措置費だけでなく補助や寄付によって成り立つ部分があった。さらに、壊れたものは直し、知恵を使って別のもので代用し、職員全体で経営努力につとめた。そのおかげもあって、積立をすることができた。

4. 連携・支え

入所児童のうちで、約4割の子どもたちがこひつじ診療所に通院し治療を受けている。(2019年3月現在)。「愛着障害」や「発達障害」と診断され、医療的ケアを必要とする子どもたちの入所が多いため、こひつじ診療所は子どもや職員にとって頼りがいのある存在となっている。

入所児童のうちで、約4割の子どもたちが小中学校の支援クラス、もしくは特別支援学校の中高等部に通っている(2019年3月現在)。子どもたちが学校に通い、そして居場所が確保されるように、学校の教員と密に連絡をとり、その都度ケース検討会などへの参加を依頼している。

児童相談所や市町の家庭児童相談センター、他の児童養護施設、児童自立支援施設など関係機関と定期的な会議やケース検討会を行い、情報の共有、内容の確認等々を行った。

東海教区主催の「わいわいワーク」をはじめ、「笠原地域福祉推進委員会」、「フィリップモリスジャパン」等の団体により、草刈り、花壇の植え替え、ガラス拭き等様々な形で支援をいただいた。職員や子どもたちも共に参加し、交流することにより地域との協力関係を図ってきた。

後援会をはじめ、袋井ライオンズクラブ、フィットネスクラブなど地域の諸団体及び個人から献金と共に米、野菜、缶詰類等々多くの食糧品の寄付をいただいている。

その他

今年度も600名を超える多くの見学者を迎えた。民生児童委員、主任児童委員を始め、保護司、更生保護女性会の会員の方々であった。

昨年同様、子どもの入退所が少なかったものの、一時保護の打診が多く、受け入れるにあたって入所している子どもへの配慮や、職員配置への急遽変更する状況が続いた。

児童記録の電子化によって、子どもと関わる時間が増えた。端的に、ときには細やかに記録する力が身についた。電子化は県内では先駆的であり、他施設から問い合わせがきている。

こどもの家 事業報告

ホーム長 伏見進吾

1. 職員

常勤2名、非常勤1名の職員体制を敷き、緊急事態の時にはまきばの家の職員が応援に入る体制にしている。職員は牧場の仕事も職務の一環として担っている。年度途中より、新規職員の募集をかけたが、採用にまでは至らなかった。児童養護施設同様、職員確保が難しい状況である。

2. 経営面

一定数の子どもの受け入れがあったため、暫定定員となることはなかったが小さな事業体ゆえに、経営は不安定である。職員に節約（電気、ガス、水道など）を促し、ないものはあるもので代用し、補助金、寄付などにも大いに助けられた。そのおかげで、積立を行うことができた。児童相談所を通じて、新入所に向けての見学を受け入れたが、入所に繋がらなかったケースもいくつかあった。

3. インケア

一時保護を含めると、例年に比べ、女子の入所が多かったため、女性職員による支援体制を強化し、必要に応じて性教育を実施した。婦人科通院に付き添うなどし、必要な手当てを行った。受け入れた子どもの個々のニーズに合わせて、既存の生活の見直しが必要だったため、いくつかのルールについて、検討し、変更した。

子どもがホームに入所する以前に生活していた施設や、そのときの担当職員と連絡を取り合い、子どもの状況を共有し、途切れのない多面的なケアを行った。

子どもによっては、自立の準備が整っていない状態で、一人暮らしを始めたい気持ちが高まったため、ホームの生活を継続していく支援から、自立のための段階を踏んでいく支援に切り替えたケースがあった。賃貸契約や就職の際、保証人を立てるまでの流れに苦労した。関係機関の協力を得て、なんとか自立に繋げることができた。

4. アフターケア

年度中に、7名の子どもが退所した（うち、一時保護2名）。退所後も可能な限り、本人や職場との電話連絡や、自宅訪問などをして関わってきたが、安定して生活できている子どもは少ない。退所時に勤めていた職場を変わりながらも、働き続けている。連絡先については、把握はできている。退所後、子どもが困ったときに関わることが多いが、その都度可能な限り関わり続けた。退所して8年以上経過しても、定期的に連絡をくれる子どももいる。

5. その他

一年を通して、改めて「牧場の中にある施設」の貴重さを感じた。子どもも職員も動物に癒され、大地に励まされたと言っても過言ではない。一緒に作業することで、言葉だけに頼らないコミュニケーションの大切さも実感した。

就業支援事業部 しあんくれーる 事業報告

代表者 小久保秀樹

児童養護施設退所者などの就業支援事業として2009年12月に設立した「しあんくれーる」は、10年目に入り、以下の活動を行った。

1. まきばの家・こどもの家OBのアフターケア活動

まきばの家やこどもの家を退所した子どもたちは、一人で解決しなければならないという困難な状況に直面することがある。

アフターケアは、本人の悩みや不安の相談に乗ることをはじめ、会社での働き具合の確認、会社の責任者との話し合い、不動産会社との仲介やハローワークへの同伴等々活動内容は多岐にわたっているが、その活動がスムーズにいくかどうかは、インケア（入所中）の時の職員との関わり如何によるものが大きく影響していると言える。

グリーンスフェアや収穫感謝祭といった行事の際に、OBに声かけをし、都合のつく限りではあるが参加してもらった。その際に、現在入所している子どもたちと交流している。入所している子どもたちにとっては、OBが社会に旅立つモデルになっている。一方、OBは、入所している子どもたち

に、社会で生活していることを誇らしげに話している。行事が終わった後は、OBと当時一緒に生活した職員が集まり、嬉しいこと、困ったこと、腹が立って納得いかないことなど、施設で生活していた同志だからこそ互いの現在の状況を語り合う機会を得ている。

2. 就業支援セミナーの開催

～「社会に旅立つ君に」これだけは伝えておきたい・・・～

施設退所予定児童等を対象にして、本年度は2回開催した。

対象 中部地区及び西部地区の7施設（児童養護施設、児童自立支援施設）

延べ参加児童 46名 延べ参加職員 18名

場所 静岡県総合社会福祉会館シズウエル（静岡市）

アクティビティ浜松コンgresセンター会議室（浜松市）

ホテルクラウンパレス浜松（テーブルマナー講習会）（浜松市）

3. 「みちしるべ」（静岡県西部地区児童福祉施設退所者の就労を支援する会）

5年目を迎えた「みちしるべ」は、昨年に引き続き「就労体験」として夏休み、春休みの長期休暇中に施設在所中の中高生の受け入れをした。18事業所が体験受け入れに手を挙げていただき、6事業所（重複あり）にて体験を実施した。2019年3月末現在40社の雇用主が会員登録していて関係諸団体から期待が寄せられているネットワークとなっている。

こひつじ診療所 事業報告

院長 武井 陽一

児童精神科や発達障がい者にも対応できる精神科診療所として、この1年も地域に密着し特色のある福祉医療活動の実践につとめた。

1. 児童精神科、発達障がい者にも対応できる精神科、心療内科として診療活動を続けた。

非常勤医師（火曜・水曜日）、看護師、精神保健福祉士、臨床心理士、教師、受付・事務職、教師たちと共に、午前8時より診察を開始し18時前後まで、40分ほどの昼休みを除いて、診察を続けた。水曜、金曜日には1日、60～80名来院するが、初診診察には60分程度を確保するように努めた。患者が予約して、2～4週間以内の比較的短期間のうちに診察することができた。

発達障がいを含む、幼児を含めて、子どもの受診が多い。成人の診察も多いが、前年度より子どもの割合がさらに増加した。（2018年1～12月：7歳未満23.9% 7～12歳30.6% 13～15歳17.1% 16～19歳8.4.%

：20歳未満 計80.0%）（2017年73.0% 2016年68.5% 2015年63.9%）

初診者数は、2018年度は461名で、2017年度は437名で、2013年301名、2014年321名 2015年362名、2016年度は444名、2017年437名に比べ、増加傾向にある。

デイケア空間にて、教師が、週3日、不登校や発達障がいの小中学生や、通信制で学ぶ高校生の個別面談や学習指導をした。「ひとむれ」の利用を念頭に、「ひきこもり」の青年の面談も多くなった。

精神保健指定医として、静岡県中東遠での救急精神医療にて措置診察が必要な患者のために輪番当番をひき受けた。通院患者が時間外や休日にも電話による相談が可能なように、患者にあらかじめ知らせた上で、常に携帯電話で対応できるようにした。

2. 静岡県ひきこもり支援センター 居場所設置運営委託事業 ひきこもり支援・交流スペース「ひとむれ」を

（2016年9月より開設・毎週月曜の午後1～5時）こひつじ診療所デイケア空間で開催した。精神保健福祉士、教師、看護師が担当した。2019年3月時点で、10歳代後半～30歳代が13名利用登録している。男女比は半々。デイケア空間でくつろぎ、ゲーム、軽食作り、デンマーク牧場の内外の散策、園芸作業などの体験を試みた。「静岡県ひきこもり支援センター」の職員などと相談しながら、よりよい支援の在り方について模索した。2019年4月より開設した就労継続支援B型事業所「いぶぎ」の利用者の検討、相談、案内もおこなった。

8月2日、『主体的に歩むことの大変さ 児童精神科臨床・ひきこもり支援の体験を通して』と題して、ひきこもり支援の関係者に対して講演した。

3. 「ディアコニア」「まきばの家」「こどもの家」により連携するためのあり方について模索した。

・2017年6月より「ディアコニア」の入所者の月2回（水曜11～12時）の精神科診察を看護師と共にした。診察以外の時間帯にも、看護師が入居者の訪問しながら、施設スタッフの相談に応じるように試みた。

・必要な「こどもの家」「まきばの家」の児童、青年を診察しフォローしている。今年度も「まきばの家」の症例検討会（児童相談所の職員なども参加）に、可能な限り参加した。「ディアコニア」の入所者も必要な方の診察を行いながら、施設スタッフの相談に応じた。

4. 比較的小規模な地域において、福祉・教育・医療連携の可能性を、特に養護が必要な発達障がいなどの子どもたちを中心に据えながら模索した。

掛川市の特別支援教育支援チームの委員長、袋井市の就学指導委員会の委員を継続して勤めた。袋井市しあわせ推進課、教育委員会、保健センターなどが横断包括的に支援する、子どもの事例検討会の委員長を勤めた。袋井特別支援学校磐田見付分校の精神科校医を勤め、袋井特別支援学校全体の教員から子どもに対する相談に応じた。

2017年4月、聖隷こども発達支援センターかるみあ（聖隷ぴゅあセンター磐田）の開設に伴い、年2回の健診を務めた。

5. 日本キリスト者医科連盟（JCMA）静岡部会（武井が部会長、金高美江子氏、蓮井風花氏が会員）と、デンマーク牧場福祉会が共催して、講演会を開催した。

6月22日、佐藤言氏（ラルッシュかなの家（静岡市）責任者）『十九の折り鶴 ラルシュのアイデンティティと使命』、9月22日、津崎哲雄氏（元・京都府立大学）『ただ一人の記憶 子どものライフチャンス保障を考える』、2月9日、泉川道子氏（愛農高校教頭）『主の御手の中に生かされて』にとそれぞれ題して講演して頂いた。

その他、5月20日に那覇聖書研究会、11月18日に日本福音ルーテル掛川・菊川教会にて礼拝での証しや公開講演した。

2019年1月19日、第66回、YMCA日本農村青年塾（御殿場東山荘）にて、小久保秀樹氏と共に、『大地に守られながら福祉・酪農・医療に携わる - 私たちは見つめられている』と題して講演した。

牧場部門 事業報告

責任者 小久保秀樹

人を耕す教育農場としてデンマーク牧場は54年間の歴史を紡いできた。豊かなる大地に牛や羊は完全放牧されており、動物たちは、ストレスなく悠々と手足を伸ばしている。牧草（粗飼料）で育った健康なジャージー牛から搾乳し、ノンホモ、低温殺菌という手間暇かけた牛乳やヨーグルトなど様々な乳製品を製造し続けている。

2018年度も、子どもとスタッフが手を取り合って、酪農作業に汗を流してきた。いつもの作業活動に加え、「地域に開かれた牧場」として、特に酪農教育ファーム活動に力を入れてきた。丁寧に酪農体験事業を重ねることで、もう一度酪農体験がしてみたいとの声もあり、近隣市内からの小学校や特別支援学校、さらには障がいを抱えた方の酪農体験の受け入れが口コミで増えていった。「農」と「食」と「命」のつながりを伝えられる機会が得られている。

営業許可に関しては、新たに法人として露店営業許可を取得し、営業力を発揮するとともに、乳製品の試作（ジェラート、バター）を重ねている。収益性を確保する努力はもちろんのことだが、食文化の担い手として、自分の子どもに食べてほしいと思える安心安全な食品作りを続けている。ディアコニア、まきばの家、こどもの家の各施設で食品として活用している。

1. 牧場運営（公益部門）

乳牛について、雌雄判別精液による受精卵の人工授精を試みており、その成果があり、次代の乳牛になる育成牛が増え、搾乳頭数が増えた。

1年に3回～4回行う「干草づくり」の作業は、毎年職員とこどもの家の子どもたちが力を合わせて行う作業である。2017年度に比べて採草量が多く、購入する粗飼料は少なくて済んだ。

1年に2ヶ所の採草地を耕起し、堆肥を入れ、翌年度の採草量の増量を図った。

酪農教育ファームとしての酪農体験の受け入れが増えた。

乳牛や肉牛をはじめとした経済動物について、飼育することによる教育的要素を踏まえながらも、経済連の獣医から積極的に家畜の生理、繁殖、飼料の栄養価などを学ぶことで理解を深め、職員が力量をつけ、経営について取り組んだ。

こどもの家の子どもたちにとって、酪農作業が「働く力」を培う土壌となっている。

2. 乳製品等販売（収益部門）

「こだわりの味協同組合」の店舗に対し工場見学の企画を催し、組合主催の展示会に出展した。その結果、乳製品等の販売数増加とともに、デンマーク牧場の特徴を伝え、さらなる理解を得ることができた。

牧場内の直営売店「グリーングラス」は、訪れた人にとって、楽しい所、思い出に残る場となるように、販売を担当する職員は、デンマーク牧場で飼育している牛やその牛から搾っている牛乳の特徴等々をしっかりと説明できるように学習してきた。

牧場通信を発行し、乳製品を配達する際に、顧客に対して、牧場の特徴をはじめとして、子どもたちの様子を伝えることで、デンマーク牧場の心強い応援団となってきている。